

## 【文科省「オープン・リサーチ・センター整備事業」報告】

### フェルメールの時代を探る [言語・文化研究センター]

言語・文化研究センターの「Anglo-Saxon語の継承と変容プロジェクト」は11月19日、東京・丸善丸の内本店で公開講座を開催した。「ヨーロッパ美術の魅力ー中世写本美術とオランダ美術ー」と題して、松下知紀本学教授（言語・文化研究センター代表）と小林頼子目白大学教授が講演。約80人が聴講した。

松下教授は同プロジェクトがこれまで購入した写本を、映像を使って紹介した。マブリテンの歴史をエドワード三世の時代（14世紀）まで記述した中英語写本「ポリクロニコン『万国史』」＝ラヌルフ・ヒグデン著、ジョン・トレヴィサ訳▽中世の教会で使用された「詩篇」、「時禱書」、「グレゴリオ聖歌集」などで、これらは当時の人々の信仰生活がうかがえる貴重なもの。今後の研究の有力な資料となると語った。また中世フランス文学の代表的作品『薔薇物語』写本2冊を購入することも紹介した。

小林教授のテーマは「オランダ美術の魅力・フェルメールをめぐる」。「デルフト眺望」「牛乳を注ぐ女」「真珠の耳飾りの少女」などの絵画作品で日本でも人気の高いヨハネス・フェルメール（1632～1675）の生涯と作品、時代背景をたどりながら当時のオランダ絵画の魅力を解き明かした。

17世紀のオランダはフェルメール、レンブラントら優れた画家と作品が存在した。16世紀末にハプスブルク家スペインから独立したオランダは、他の欧州諸国に先駆け、いち早くプロテスタントの市民社会を形成した。以後100年余り、未曾有の経済繁栄がもたらされた。

社会の主役である市民たちは、それまでの主流だった教会の神話画や宗教画ではなく、周りの事象や出来事を写実的に映し出した親しみやすい風俗画を求め、その需要は一気に高まっていく。フェルメールは、そのような風俗画で比類ない作品を生み出した。

フェルメール研究の第一人者である小林教授は「作品の特徴は静謐のなかに写実的迫真性を持ち色彩、光、幾何学的遠近法の処理が実に巧みであることだ。時に操作によって描き出されたものもある。それは作品が持つ写実性のもう一つの側面であり『このような世界を描いてほしい』という人々の心象の反映ではないか」と指摘した。

同プロジェクトは11月3、4、5日にも神田キャンパスで国際公開講座「オックスフォードの中世英文学」を開催。延べ100人が参加した。



小林目白大教授



▲丸善丸の内本店の会場で。講演者は松下教授

## 【文科省「オープン・リサーチ・センター整備事業」報告】

### 東アジアにおける「フランス革命」の受容論じる [歴史学研究センター]

11月18日、生田キャンパスで社会知性開発研究センター／歴史学研究センター主催の国際シンポジウム「アジアの近代とフランス」(文科省オープン・リサーチ・センター整備事業)が開催された=写真。フランス革命の理念がどのように近代の東アジアに受容されたかを問題提起、日、中、韓、仏の4人の研究者が論じた。



井田進也・大妻女子大学教授の『『海国図志』・『瀛環志略』から『西洋事情』へ』は幕末維新期のフランス革命情報が次第に正確になっていく過程を見通した。區建英・新潟国際情報大学教授の「嚴復とモンテスキューー『仁政』の転回と政治的自由』は啓蒙思想を中国の伝統的な理念に読み替えていく過程を追った。権純哲・埼玉大学教授の「フランス革命理解からみる韓国近代の思想課題」は植民地化の危機にあった韓国で民権よりも国権回復という観点からフランス革命が捉えられたことを明らかにした。長谷川イザベル・上智大学教授の「日本女性の捉えたフランス近代・女性」は日本におけるフランス人女性の権利のイメージと実態との違いについて指摘した。また、歴史学研究センターの青木美智男、内藤雅雄両教授(いずれも本学文学部)が総括とインドなどの事例について考察した。

報告とその後の討論を通じ、フランス革命についてのイメージが地域・時代により大きく異なることが示された。これと関わって、フランス革命の情報がどのように東アジアに入ったのか、その情報の「質」や「量」の違い、フランス革命の情報を受容する側が、その意味や理念を、地域が抱える現実の課題に規定されながら選択し、改変していくという特徴が明らかとなった。

シンポジウムの参加者との議論も行われ、日本の現在の「人権」意識の抱える問題点などが主要な関心となった。

長時間にわたるシンポジウムであったが、研究者ばかりでなく市民の方々など130人余りが参加。フランス革命についての関心の高さをうかがわせるものであった。

なお、シンポジウムの詳細は『歴史学研究センター年報』(第4号、2007年3月発行予定)に掲載される。

歴史学研究センターでは、11月に本学図書館所蔵の4万数千点にのぼるフランス革命の史料「ベルンシュタイン文庫」の検討を通じた総括的なシンポジウムを開催する予定である。

(歴史学研究センター)

## 【文科省「オープン・リサーチ・センター整備事業」報告】

### 「川崎市の新しい姿の創出」シンポで提言 [都市政策研究センター]

都市政策研究センターが取り組んでいる「イノベーション・クラスター形成に向けた川崎都市政策への提言」(04~08年度事業)の一環として国際シンポジウム『ラゾーナ川崎』のオープンと中心市街地の活性化」が11月26日に神田キャンパスで開催された。



06年9月、川崎駅前の工場跡地に建設されたこの複合商業施設が、川崎の活性化にどう反映するかを中心テーマとして、中心市街地空洞化の再生と活性化への取り組みを紹介しながら検証した。

はじめに関根孝商学部教授が「中心市街地活性化の課題」と題して講演。川崎をはじめ東京、函館、広島での商業施設などによる空洞化への対応策、また中国、韓国での中心市街地の現状と行政施策、成功事例としてドイツ、イタリア、イギリス、フランスなどでの効果的個店配置による市街地造りを紹介し、市街地活性化の課題として(1)ニュービジネスが創出する土壌の醸成(2)タウン・マネジメントの必要性(3)魅力ある個店や「川崎ブランド」の構築が必要、と指摘した。

続いて三井不動産商業施設本部リージョナル事業部事業推進グループの後藤敬信主事が「ラゾーナ川崎の開発コンセプト」について講演。川崎駅と直結させた5階建ての同施設は、約300の専門店が出店し、映画館、スポーツジムのほか、コミュニティの核として、キッズパーク、芝生広場などを備えている。「ラゾーナ」はスペイン語のLAZO(絆)とZONA(地域)の造語であるが、これを基本コンセプトに、地域と社会、人と自然、人と人のつながりを象徴させ、都市川崎の新しい姿・顔の創出を目指した経緯を述べた。

次に中国中商商業経済研究中心の于淑華副主任研究員が、北京の中心商業地での各種施設の進出状況や、ビジネス街と幹線道路でダイレクトに結んで集客対策としていることなどを説明し、教育、医療、インフラなどが完備され、快適な都市環境にあることが空洞化を防いでいると語った。

韓国流通物流振興院の白寅秀流通情報室長は、ソウル中心部を流れる清溪川の上の高速道路を撤去し、下水路だった川の覆い蓋もはずして清流に復元、新リバーサイド街を完成させた事例を紹介し、市街地の活性化に貢献していると述べた。

三井物産戦略研究所の小村智宏主任研究員(都市政策研究センター客員研究員)は、中心市街地活性化にインパクトを与えるために、複合型商業施設が留意しなければならない展開方法などについて言及した。

パネルディスカッションは黒田彰三経済学部教授をコーディネーターに、講演したパネリストのほか平尾光司教授を加えて、川崎市の再開発、魅力ある市街地造りのコンセプトなどについて討論を行った＝写真。「ラゾーナは都市機能のイノベーションによる新しい姿で、ミューザ川崎なども加えて、これらを自然資源の多摩川と結びつけることが『川崎の再生』につながる」など有意義な提言があった。

この模様は川崎市産業振興会館、生田キャンパスにも同時中継され、3会場を結んで活発な論議を展開した。

## 「専修人の新しい本」

### 会社法の仕組みと働き〈第4版〉

新山 雄三著

10年前に初版が刊行された会社法体系書の06年新会社法対応の全面改訂版であるが、革命的ともいわれる大幅な規制緩和を内容とする新会社法への、全面的な批判的検討を内容とするものになっている。単なる内容解説に終始している類書の中で、全編一貫して会社法の何たるかを立法政策論点により原理的に考察しようとする注目されるべき著書となっている(日本評論社・本体4000円＋税)。



著者(にいやま・ゆうぞう)＝法科大学院・法学部教授。主な担当は会社法Ⅰ・Ⅱ、企業組織法、同演習、企業統治法ほか。

### 子供の文化史

島田 孝右監修

イギリスで1700年から1750年までに刊行された子どもに関する史料集である。子どもの教育に関する手引きの論説から、子どもに残す遺言、医学的見地からみた子育て法、子どもを巻き込んだ事件簿など、内容が大変興味深い。18世紀イギリス文学研究者が最も注目するのは、ジョナサン・スウィフトの『一つの謙虚な提案』(1729)で、貧民の子どもへの対処法として、一歳児を食用にせよという恐ろしい提案がなされている。この作品は、サルマナザール作『台湾誌』(1704)から影響を受けたとされている。



編者による適切な解説がついており、この分野に不案内な人にとって非常に役に立つであろう(ユーリカ・プレス・本体9万8000円＋税)。

監修者(しまだ・たかう)＝商学部教授。担当は英語。編者・圓月優子(えんげつゆうこ)＝同志社大学教授。

### 俳人のための やまとことばの散歩道

林 義雄著

「やまとことば」とは、日本固有の言語を指す名称。俳句・俳諧・川柳などの短詩形文学作品を中心に、古典や近代文学作品も視野に入れ、そこに表れた「やまとことば」を通して、日本語の移りかわりに関する問題に力点を置いた語学エッセイである。



昨年好評を博した『俳人のためのやまとことばワンポイントレッスン』の続編にあたり、著者がこれまで発表した文章に新たな用例を加えて稿を改めたもの。さらに、著者のブログ「専修大学文学部林ゼミ写真帳」(<http://hyszem.exblog.jp/>)に発表した記事も収録されている。

書名には「俳人のための」とうたわれているが、日本語に関心を寄せる読者の読み物としてもふさわしい興味深い話題が随所に取り上げられている(リヨン社・本体1700円＋税)。

著者(はやし・よしお)＝文学部教授。担当は日本語の歴史資料研究ほか。

